

アジア・太平洋研究センター主催，国際地域文化研究科共催講演会

日 時：2025 年 1 月 10 日（金）

場 所：南山大学 Q 棟 5 階 51, 52 会議室

テーマ：日本の台湾統治と植民地モダンを考える

報告者：洪郁如氏（一橋大学大学院社会学研究科教授）



講演の概要

本講演会は、一橋大学大学院社会学研究科教授である洪郁如氏に來学いただき、洪郁如氏の長年の研究テーマである日本帝国の台湾統治とモダニティの関連について、被植民者の経験とりわけ女性の経験にも焦点をあてながら、最新の知見をご報告いただいたものである。当日は、当該テーマに関連する写真やポスター、映像など多彩で豊富な資料も紹介いただきながら報告がなされた。以下、その概要について述べていく。

まず冒頭で、今回の講演のテーマについて、①戦前、特に 1920 年代以降の植民地台湾と戦後民主化以降の台湾をつなぐ「モダン」について考察するとともに、②日本統治期の台湾の「モダニティ」が、現代の台湾および日本でどのように再考されているのかを考察するという 2 点が明確に示された。

その上で「第一部 戦前台湾・帝国植民地の時代」では、まず日本帝国の植民地統治のもとで台湾の「近代化」が進められていったことは事実だが、それは「目的性、機能性、選別性による不均等性」を特徴しており、その点に留意することが重要であるとの指摘がなされた。さらに日本帝国は台湾支配において重要なものに優先的に資源を投入してそれらを「近代化」とするとともに、植民地における「近代化」の成果を

ある種の演出を伴いながら積極的に「展示」すなわちアピールしていった状況が当時の写真などを駆使して具体的に説明された。さらにそのような動きに対抗する被支配者側の視点と戦略が、ファッションを例にして論じられ、とりわけ1920年代以降の植民地台湾における「新女性」と「モダン」の間の複雑な関係性が指摘された。

次に「第二部 戦後台湾・民主化以降の時代」では、戦後台湾とりわけ1987年の「戒厳令」解除以降の台湾社会の民主化という動向の中で、日本統治期についての関心が高まった背景が説明された。その上で、民主化以降、台湾の博物館において、日本統治期の「近代化」に関する「展示」が積極的に行われてきた状況について説明されるとともに、それは台湾の近代と重なるためであり、日本統治期の歴史的な記憶を通して、台湾社会にとっての近代の意味を確認する作業であったという重要な指摘が行われた。また日本社会における戦前・帝国植民地期に関する「歴史記憶」には失われた部分が多く、特に植民地であった台湾に関する部分は大きく欠落しており、日本社会の「歴史記憶」の中で台湾統治期の記憶をどのように取り戻せるかは重要な課題であるとの指摘がなされた。

その上で現在の台湾において、日本統治期の「近代化」がどのように「展示」されているのかについて、その具体例として台湾を代表する博物館である「国立台湾博物館」、「国立歴史博物館」、「国立台湾歴史博物館」が取り上げられ、特に2011年に台南に設立された「国立台湾歴史博物館」の現在の展示の状況が、具体的な展示の様相を映した写真などを駆使して、具体的に紹介された。

そしてこれらの博物館における「展示」による日本統治期すなわち「日本時代」の可視化については、台湾の「歴史記憶」をめぐる実践のパラダイムの中で理解する必要がある、「展示」によって可視化される「日本時代」はわれわれ台湾の歴史の一部であり、必ずしも特出させようとする意図に基づくものではないとの指摘がなされた。その上で、これらの博物館の「日本時代」の「展示」においては、日本の支配そのものをどのように位置付けるかは説明されていないが、それは現在の台湾の複雑な政治的状況の反映であり、その点に留意することの重要性が丁寧に説明された。

そして現代の台湾社会における多元性の尊重という流れの中で、「台湾の社会文化の多様性と多様な価値の対話を促進すること」を博物館の目的の一つとして明確に打ち出している「国立台湾歴史博物館」の展示について、「日本時代」の「展示」がどのように行われているのかが、特に女性に関する展示を例として説明がなされた。例えば「日本時代」の台湾女性の人生の選択肢の幅を示す「展示」において、どのような工夫がなされているかが展示の様相を映した写真を駆使して具体的に示されるとともに、そのような工夫によっても表象しきれない部分の問題性について説得的に説明された。

さらに現在の台湾社会の中で日本統治期の建設物が復元され観光の対象となってい

る状況について、そこから日本人が台湾旅行の経験を通じて、保存・活用された「日本時代」に関連する様々な建築物を見学した結果、日本統治期に対し、台湾社会が肯定的な評価を与えているのだと理解する傾向が生じているが、それは「誤読」の可能性をはらんでいることが指摘された。すなわち「日本時代」は台湾にとっては、現在に最も近い「歴史」なので史跡数は必然的に他の時代よりも多いことに注意する必要がある、「植民地主義・帝国主義的なまなざしを無意識に再生産されることを避けるために、物事の背後にある台湾自身の文脈」、すなわち「多元化への尊重」や「パブリック・ヒストリーの実践」という点に留意すべきだという重要な指摘が行われ、報告を終えられた。

(文責：松田 京子)